

| | | | |
|---------|---|-----------|--|
| 氏名 | 金原 京子 | | |
| 学位の種類 | 博士 (学術) | | |
| 学位記番号 | 第 6341 号 | | |
| 授与報告番号 | 乙第 2841 号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成 28 年 12 月 22 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 2 項該当者 | | |
| 学位論文名 | 介護老人福祉施設の介護職員が有する看護職員との連携における役割 ストレッサー (Role Stressors among Care Workers in Care Collaborations with Nurses in Nursing Homes) | | |
| 論文審査委員 | 主査教授 岡田 進一 | 副査教授 所 道彦 | |
| | 副査教授 岩間 伸之 | | |

論文内容の要旨

申請論文は、介護職員が行う看護職員との連携活動に着目し、連携活動における介護職員の役割ストレッサーに関する具体的な内容の構造と役割ストレッサーの軽減につながる関連要因を実証的に明らかにしている。これまでの介護分野における連携に関する研究では、連携における負担感や連携活動の曖昧さに焦点が当てられた研究が多く、本論文のように、他の専門職との連携活動から生じるストレッサーに焦点が当てられた実証的研究は非常に少ない。本論文は、序章ならびに第 1 章から第 5 章、終章から構成されている。序章では、研究の背景ならびに問題の所在についての整理が行われ、明確な研究目的の設定が行われている。第 1 章では、文献により、介護分野における連携や連携における役割ストレッサーに関する概念について批判的な検討が加えられ、それぞれの概念についての整理がなされている。第 2 章では、役割ストレッサーについて、介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）の介護職員を対象とした量的調査が行われている。分析の結果（因子分析）、3 つの構成概念が役割ストレッサーモデルに基づく仮説どおりに抽出された。また、それぞれの因子の信頼性係数も適切な値を示していた。そして、本研究で開発された役割ストレッサーに関する尺度は、信頼性（内的一貫性）及び妥当性（内容妥当性）を有しているとの結論に至っている。第 3 章では、第 2 章で分析を行った役割ストレッサーとバーンアウトとの関連性についての分析が行われている。役割ストレッサーは、「職務を発揮できない不全感（役割葛藤）」、「相対的役割過剰感（役割過剰）」、「業務分担の認識相違から生じる困難感（役割曖昧性）」から成り立っている。それらの因子や基本属性などを独立変数とし、バーンアウトを従属変数とする重回帰分析の結果、「職務を発揮できない不全感（役割葛藤）」が看護職員との連携における困難感を予測するための重要な因子であるとされ、また、その因子の得点が高くなると介護職員はバーンアウトする傾向にあるとしている。第 4 章では、介護職員においても「役職者」と「非役職者」とで業務内容に違いがあり、また、看護職との連携の質にも違いがあると考えられ、「役職者」と「非役職者」のサンプルを分けて、役割ストレッサーとバーンアウトとの関連性についての分析が行われた。その結果、「非役職者」のサンプルにおいては、役割ストレッサーとバーンアウトとの関連性が強く、「役職者」のサンプルにおいては、その関連性が弱くなる傾向が見られた。「非役職者」には、介護に関する資格（例えば、介護福祉士など）を有していない者もあり、専門的な知識や技術を有していないため、看護職員との連携で役割ストレスを強く感じ、バーンアウトしやすい傾向にあると考察されている。第 5 章では、「役職者」のストレッサーについての分析が質的調査によってなされている。第 4 章で「役職者」サンプルにおいては、連携で生じる役割ストレッサーがあまり強くないということが明らかにされた。しかし、多様なストレッサーが「役職者」には生じていることが、量的調査に付随して行われた質的調査（自由記述分析）で明らかとなった。「役職者」の主なストレッサーは、社会的地位・給与の低さ、勤務時間の調整やワークライフ・バランスの難しさなどであった。終章では、上記の研究結果を踏まえ、いくつかの提言がなされている。「非役職者」に対しては、卒後教育や研修内容の充実などがあげられ、「役職者」に対しては、職場環境やキャリアパスの整備、ワークライフ・バランスの視点からの

柔軟な勤務体制の構築などがあげられていた。

論文審査の結果の要旨

申請論文では、介護分野における連携と専門職連携から生じる介護職員のストレスについてのさまざまな議論が整理され、介護職員が有する看護職員との連携における役割ストレスサーに関する仮説的なモデルについて実証的な方法で検証が行われ、また、役割ストレスサーを軽減させる関連要因についての分析も行われている。また、介護職員を「役職者」と「非役職者」とに分けて分析が行われ、「非役職者」が役割ストレスサーを強く感じ、また、バーンアウトしやすい傾向にあることも明らかにしている。本論文では、研究で得られた結果から、今後の介護実践および具体的な介護職員のストレス軽減や職場環境改善に役立つ具体的な実践的含意が示されている。そして、これらの知見は介護分野における重要な知見である。また、これらの知見を集約し、考えられた提言は示唆に富んでいる。本論文で得られた知見及び示唆に富んだ提言の内容から申請論文は高く評価することができる。慎重に審査を行った結果、本審査委員会は申請論文が博士（学術）の授与に値するものと認めた。